

終刊の辞

駒澤短期大学仏教科主任 奥野光賢

駒澤短期大学（仏教科・国文科・英文科）は、学校法人駒澤大学理事会の決定により今年度から新規の学生募集を停止し、在学生の卒業をもって半世紀を超える歴史を閉じることが正式に決まった。これに伴い、平成七年度学科独立を機に刊行が開始された本論集も残念ながら今号をもって終刊としなければならないことになった。まさに断腸の思いである。

仏教科の沿革と学科独立の経緯については、本論集第一号の袴谷憲昭先生による「創刊の辞」に詳しいのですべてはそれに譲りたいが、それにしても学科独立後わずか十二号で本論集を終刊とせざるを得ない状況になったことに言いようのない無念さと責任を痛感している。

いわゆる「十八歳人口の激減」については、すでに前の袴谷先生による「創刊の辞」にも明らかのように、われわれもけつしてこれを認識していなかったわけではないが、まさかこれほど早くその影響をわが大学が被ることはなろうとは夢想だにしていなかった。これは悔恨を込めて正直に告白しておかなければならないことである。大学当局は一時期、新たに取得した深沢校舎に瀟洒な新校舎を建築すれば短大の存続はまだ可能であるとして、短大の深沢校舎移転を短大教授会に提案し、短大教授会もこの案を受諾せざるを得なかったが、結局この案は一度も全学教授会に上程されることなく、短大問題は最終的には今日のような結論を見るに至ったのである。学校法人駒澤大学における短大廃止の是非は、今後の歴史の判断に委ねるほかないが、半世紀以上にわたって果たしてきた駒澤短期大学仏教科の社会的功績は長く語り継がれていくであろうことを確信している。

さて、上述のように平成七年度学科独立を期して刊行が開始された本論集には、専任教員五名の論文の他に、非常勤講師の先生方の諸論文、それに学科独立以降毎年行われるようになった仏教科公開講演会の講演録等を収録している。東京大学名誉教授山口瑞鳳先生を第一回講師としてお招きして開始された公開講演会は、毎年好評を博して多くの聴衆を集め、論集に収録された講演録の内容についても外部から高い評価が寄せられていることは私どもの大きな喜びとするところである。本年も十一月十七日（金）に北海道大学大学院教授藤井教公先生をお迎えして仏教科最後の公開講演会を予定しているが、本論集の終刊により藤井先生の講演録を活字化できないことを残念に思うとともに、藤井先生にはあらかじめ寛恕とご理解を乞う次第である。

ところで、本論集の特徴として特筆されなければならないことは、「彙報」として専任教員の研究活動を明記し、外部にむけて積極的に「自己点検・自己評価」の発信をなしたこと、また第二号からは学生の「研究テーマ」を掲載し、学生に自発的研究を促したことがあげられる。そして、われわれの期待に応えるかのようにこれまで三名の学生が「研究テーマ論文」を執筆し、専任教員の査読を経て見事に本論集にそれらの成果を発表できたことはとりわけ嬉しい出来事として記憶される。社会人を中心とした熱心な学生の多くは短大を終えてそのまま仏教学部に入学し、さらに大学院まで進出して研究者として自立しようとしているものも少なくない。そうした現状を見るにつけ、論集に「研究テーマ」を掲載したことは成功だったのではないかと秘かに自負するものである。かかる論集を今後継続できないことは残念の極みであるが、これも歴史の流れと思ひ定め、次の舞台に飛躍しよう。本論集はこれをもって終わりを迎えるが、また駒澤短期大学仏教科は最後の卒業生を送り出したわけではない。在学生のいる限り、これまで以上に教育と研究を充実させ、名誉ある最後を迎えたいと思う。

終わりにこれまで短大仏教科をご支援下さった諸先生、事務関係者、卒業生、在学生、すべての皆さんに深甚なる感謝の誠を捧げ、本論集の「終刊の辞」とする。

（平成十八年九月十八日）